大山阿夫利神社

火祭薪能

令和七年（第四十四回）

Oyama Afuri Shrine

Fire Festival TAKIGI NOH

October 1, 2025

主催／火祭薪能実行委員会
一般社団法人伊勢原市観光協会

第四十四回 大山火祭薪能 開催に際して

一般社団法人
伊勢原市観光協会会長
火祭薪能実行委員会委員長
大山阿夫利神社宮司
目黒 仁

天候不順や世情の移ろいにより、人心に陰りの差す昨今ではございますが、多くの方々のご尽力とご協力に支えられ、本年ここに第四十四回大山火祭薪能を斎行できますことは、まさしく阿夫利大神様の大御心に適いしものであり、深き感謝と共に敬虔なる喜びを捧げる次第でございます。古来より、神の住まう山、霊峰と仰がれる大山にて、今年もこの幽玄なる薪能を開催できますことは、実行委員会一同にとりまして誠に光栄に存じます。

大山能の淵源は三百余年前の元禄年間に遡り、徳川幕府の庇護を受け、大山の融和と興隆を祈念して、紀州観世流能楽師・貴志又七郎を招き、山内の人々に能楽を修めさせ、年に二度の演能を行ったことに始まると伝えられております。能を通じて人々が心を磨き、和を重んじ、互いに切磋琢磨しつつ今日まで受け継がれてきた伝統は、まさにこの地の宝でありましょう。

激動の世界の中にあって、日々人々の心に不安が差し込む今こそ、この火祭薪能を通じて、神火の浄らなる炎に照らし出される幽玄の世界に身を委ね、煩わしき俗事を離れ、ひとときの安寧と祈りを得ていただきたく存じます。阿夫利大神様のご加護のもと、平穏を希求する尊きひとときとなりますことを心より念じ上げます。

また、本年も例年と変わらず、この舞台に華を添えてくださいます観世宗家・観世清和師をはじめとする観世一門の皆様、さらに大蔵流山本東次郎師一門の皆様という、国の至宝たる名演者をお迎えできましたことは、薪能の大きな誉れでございます。加えて、毎年変わらぬご献灯・ご協賛を賜る皆様、並びに開催に尽力されました実行委員会の方々に、ここに謹んで深甚なる謝意を表します。

結びに、世界を覆う戦禍や混乱が一日も早く鎮まり、ここにお集まりの皆様のご健勝と弥栄が末永く続きますことを、心より祈念申し上げ、大山火祭薪能実行委員会、伊勢原市観光協会を代表してのご挨拶といたします。

火祭薪能ごあいさつ

伊勢原市長
萩原 鉄也

ふるさと伊勢原のシンボルである阿夫利嶺大山。この伊勢原に住む多くの人々の心を魅了し、癒してきた御山は、悠久の時の流れのなかで、変わることないその端麗な姿で、この地に住む私たちに不動のやすらぎを与えてくれています。

自然が織りなす四季の変化の中で、大山が一段と魅力的な装いを見せるこの季節に、伝統と格式の中に伝えられてきた「火祭薪能」が、今年も大山阿夫利神社能楽殿で厳かに開催されます。

約三百年前に大山能として誕生し、幾多の先人により受け継がれてきた「火祭薪能」は、伊勢原が誇る素晴らしい文化芸術資源です。観世宗家の多大な御理解と御協力のもとに、積み重ねてこられた大山阿夫利神社関係者のたゆみない御努力に対して心から敬意を表します。

さて、本市では、大山阿夫利神社の能狂言を含む多数の文化財を構成文化財として、文化庁から日本遺産に認定されています。

日本遺産認定ストーリー
『江戸庶民の信仰と行楽の地
～巨大な木太刀を担いで
「大山詣り」～』

本年は、平成二十八年度の認定から二度目の継続認定を受け、来年は節目となる日本遺産認定十周年を迎えます。日本遺産ブランドをさらに活用し、多くの方にお越しいただける活気ある観光地づくりを進めてまいります。

「火祭薪能」は、大山における日本文化の魅力を国内外に発信するために重要な催しであり、日本遺産である「大山詣り」を未来につなぐ、その一端を担っていただけることと存じます。

この「大山」の大自然に包まれて、伝統と格式の中に伝えられてきた峻厳さと優雅さを体現する能狂言が、大山阿夫利神社能楽殿で演じられますことは、まさに本市の誇りです。

篝火の中に浮かび上がる能舞台の、幻想的で気品漂う、非日常の異空間「幽玄の世界」を、海外を含めた多くの皆様に、心ゆくまで御堪能いただきたいと思います。

御挨拶

二十六世観世宗家
観世 清和

本日「火祭薪能」が開催されます事 心よりお慶び申し上げます

薪能は 古来「薪の神事」と謂われ 流祖 観阿弥 世阿弥 音阿弥 の時代には 神前 仏前にて 薪を焚き 祈りを捧げる宗教儀礼でございました

本年は永和元年（一三七五年）京都 新熊野神社にて 室町幕府 三代将軍 足利義満公が 観阿弥・世阿弥父子の「翁」を 初見されてから数えて六五〇年の節目の年でございます

今宵 霊峰大山の壮大な自然の元 阿夫利の大神様に御奉納させて戴きますと共に 流祖の時代に想いを馳せ 能の源流を尋ぬる事は 身の引き締まる思いでございます

悠久の時が育んだ 大山様の歴史と文化 そして厳かなる空気を 火祭薪能に思いを起こして戴きますれば 幸甚に存じます

本日は「一人翁」「鵜飼 空之働」を ご覧戴きます

「鵜飼」は世阿弥の「申楽談義」に記述のある 世阿弥作の名曲でございます

どうぞごゆっくりご観能下さい

最後になりましたが、薪能開催にご尽力賜りました 大山阿夫利神社 目黒仁 宮司様はじめ 伊勢原市 伊勢原市観光協会並びにご関係の皆様方へ心より御礼を申し上げご挨拶とさせて戴きます

大山火祭薪能によせて

大蔵流狂言方
山本 東次郎

今年の夏は例年にも増して驚くほどの酷暑でした。今はまだ異常気象と呼ばれていますが、これが近い将来、「異常」ではなく「当たり前」になってしまうかもしれない、また、日本固有の美しく移り変わる四季が無くなってしまって、極端な夏と冬だけになってしまうのかと陰鬱な気持ちになってしまいます。

それでも秋風が立ち、朝夕の心地よさを感じる頃、「大山火祭薪能」が巡ってまいります。厳然たる霊峰・阿夫利山の山懐で営まれる薪能、出演者の人々も数多の世代交代がなされているなかで、今年も健康でそこに加えて頂けることに大きな喜びと万感の思いがあります。

さて、今年は太平洋戦争敗戦から八十年ということで、あの戦争を振り返る報道が様々ありました。思い出すのも辛いことですが、再びあの惨禍を繰り返すことのないよう、体験した者が伝えていかなければなりません。そんなことを考えながら古い白黒のニュース映像、そして今現在の世界の様子をあれこれ見ているうちに、ふと気づいたことがありました。

私は花火がとても嫌いです。夏の夜空を鮮やかに彩る花火、今年も全国各地で花火大会が開催され、多くの方々が喜んでご覧になっていますが、私にとってその光景はただただ不安なものでしかありません。なぜ嫌いなのか、特に理由など考えたこともなかったのですが、八十年も経って初めて思い当たったことがありました。弟の則俊が亡くなって今年は三回忌、追善会のプログラムに追悼文を載せることになり、則俊が生まれた時のことなどあれこれ思い返しているうちにふと蘇ってきたのです。

昭和十七年の春から始まったアメリカ空軍による日本本土への爆撃、二十年三月十日の東京大空襲、その後も砲弾の降る日が続き、ある時から不思議な光景を目にするようになりました。それは飛来するB29爆撃機に対して地上から小さな光の球が打ち上げられるのです。それが命中すると、次の瞬間、B29は真っ赤に染まって爆発し、木っ端微塵に砕け散ります。それを目にした八歳の私はもの凄い恐怖と戦慄を覚えました。しかし敗色濃い日本人にとっては皆、それが起死回生の魔法兵器に思えたのでしょう。「ヤッター!」などというお行儀の悪い言葉こそありませんでしたが、「そら、命中したぞ。やっつけたぞ」、大人たちは歓喜の声を上げていました。その頃則俊はまだ母の背中に負われていた三歳の子どもでしたが、夜空で繰り広げられるその光景と大人たちの歓喜の声に触発されたのか、幼い声で「テッキバラバラ、テッキバラバラ」と声を上げました。片言を話すようになったばかりの幼い弟が、状況もわからぬままに発する「テッキバラバラ」すなわち「敵機バラバラ」、あの声を思い出しました。夜空に鮮やかに炸裂するその様はまさに「悪魔の花火」、だからその記憶から私は花火が嫌いなのだと気づきました。

新潟県長岡市で行われる花火大会は長岡空襲で亡くなった方々への鎮魂のために始まったと聞いています。他にも多くの地域でそうした意味も込めて夜空に打ち上げられる花火はあるのでしょう。それでも私は花火を「善きもの」として見ることはできません。

狂言は「平和」を愛する舞台芸術です。人間の愚かしさを真正面から見つめていますので、さまざまないさかいが出て参ります。しかし決して「死」に向かうことはありません。狂言の終わり方はあいまいでつまらない、わかりにくいと思われる方も少なくないでしょう。それはすべてを平和裏に収めたいからです。衝撃的な結末で締めくくれば演劇としてはとても印象深く、効果的に違いありません。しかし狂言は敢えてそうせずに、能にバトンをお渡しするのです。そして明日も明後日も同じようなことを繰り返しながら、愚かでも明るく確かに生きていく人間の姿をお見せするのです。

「火」は人間に大きな恵みを与えてくれますが、その反面、甚大な禍をもたらすもの、だから聖なるものとして祭るのでしょう。私はこの「火祭」と冠した大山薪能を他とは違う、よりストイックな心で毎回勤めて参ったと自負しております。この「大山火祭薪能」がこれからも続いていくことを心より願って演じさせて頂きます。

火祭薪能式次第

〈初日〉令和七年十月一日（水）
開演＝午後四時三十分
終演＝午後七時三十分（予定）

一、大山狂言・仕舞
一、歓迎の挨拶
一、修祓
一、神火入場
一、火祭神事

＊　＊　＊

一、火入れ式
一、僉義
一、「一人翁（ひとりおきな）」
一、仕舞「道灌（どうかん）」
一、仕舞「羽衣（はごろも）キリ」
一、狂言「秀句傘（しゅうくからかさ）」
一、能「鵜飼（うかい）空之働」
一、附祝言

大山阿夫利神社薪能

令和七年十月一日（水）

一人翁（ひとりおきな）

山階彌右衛門

関根祥丸
武田友志
上田公威
坂口貴信

仕舞

道灌（どうかん）　松木千俊
羽衣（はごろも）キリ　武田文志

久田勘吉郎
武田友志
藤波重彦
木月宣行

狂言

秀句傘（しゅうくからかさ）

大名　山本東次郎
太郎冠者　山本凜太郎
新参者　山本則秀

能

鵜飼（うかい）空之働

尉　観世清和
閻魔大王　観世三郎太
旅僧　福王和幸
里人　山本凜太郎
後見　上田公威
　　　武田尚浩

大鼓　亀井広忠
小鼓　観世新九郎
太鼓　林雄一郎
笛　杉信太朗

地謡
杉浦悠一朗
関根祥丸
武田文志
清水義也
角幸二郎
松木千俊
浅見重好
藤波重彦

The Performers

演者紹介

演者（シテ方）の紹介
Shite kata (Principal character)

© 鍋島徳恭

観世 清和（かんぜ きよかず）
Kanze Kiyokazu

二十六世観世宗家
昭和三十四年生まれ
二十五世観世左近の長男
重要無形文化財総合指定保持者
（財）観世文庫理事長
（社）観世会理事長
（社）日本能楽会副会長・常務理事
（公社）能楽協会顧問
（公社）日本演劇協会理事
（財）日本中国文化交流協会副会長
能楽宗家会 会長
日本ワグナー協会評議員
東京藝術大学客員教授
芸術選奨文部大臣新人賞受賞
フランス芸術文化勲章シュヴァリエ受章
渋谷区制70周年記念特別表彰
芸術選奨文部科学大臣賞受賞
第三十三回伝統文化ポーラ賞大賞受賞
平成二十七年紫綬褒章受章
令和元年JXTG音楽賞受賞
令和三年日本芸術院賞受賞
令和五年日本芸術院会員就任
同年　文化功労者認定顕彰

© 鍋島徳恭

観世 三郎太（かんぜ さぶろうた）
Kanze Saburōta

シテ方　観世流
平成十一年生まれ
二十六世観世宗家 観世清和の嫡男
父 二十六世観世清和に師事
（財）観世文庫常務理事
（社）観世会 副理事長

山階 彌右衛門（やましな やえもん）
Yamashina Yaemon

シテ方　観世流
昭和三十六年生まれ
二十五世観世左近の次男
父及び二十六世観世清和に師事
重要無形文化財総合指定保持者
（財）観世文庫常務理事
（社）観世会副理事長
令和二年伝統文化ポーラ賞優秀賞受賞

演者（ワキ方）の紹介
Waki kata (Supporting main actor)

福王 和幸（ふくおう かずゆき）
Fukuō Kazuyuki

ワキ方　福王流
昭和四十八年生まれ
ワキ方福王流十六世宗家
福王茂十郎の長男
父に師事
重要無形文化財総合指定保持者
平成八年大阪さくやこの花賞受賞

演者（狂言方）の紹介
Kyogen kata

山本 東次郎（やまもと とうじろう）
Yamamoto Tōjirō

狂言方　大蔵流
昭和十二年生まれ
三世山本東次郎の長男
重要無形文化財保持者
各個認定（人間国宝）
芸術選奨文部大臣賞受賞
紫綬褒章受章
日本芸術院会員
旭日中綬章受章
文化功労者認定顕彰

演者（囃子方）の紹介
Hayashi kata (Musicians)

杉 信太朗（すぎ しんたろう）
Shintaro Sugi

笛方森田流
昭和六十一年生まれ
杉市和の長男
父に師事
（公社）能楽協会会員

観世 新九郎（かんぜ しんくろう）
Kanze Shinkurō

小鼓方　観世流十九世宗家
昭和四十年生まれ
十八世宗家観世豊純の長男
重要無形文化財総合指定保持者
（社）日本能楽会理事
（社）東京能楽囃子科協議会理事長

亀井 広忠（かめい ひろただ）
Kamei Hirotada

大鼓方　葛野流十五世家元
昭和四十九年生まれ
十四世家元亀井忠雄の長男
父及び八世観世銕之丞に師事
重要無形文化財総合指定保持者
ビクター伝統文化振興財団賞奨励賞、
日本伝統文化奨励賞
第四十三回 伝統文化ポーラ賞優秀賞
観世寿夫記念法政大学能楽賞
平成二十八年家元継承

林 雄一郎（はやし ゆういちろう）
Hayashi Yuichiro

太鼓方　観世流
昭和五十六年生まれ
観世元伯に師事
（公社）能楽協会会員

秀句傘

【しゅうくからかさ】

【物　語】

この頃、皆が寄り集まって何か言っては笑っているのを不審に思った大名が太郎冠者に尋ねると、それは「秀句こせ事」(言葉遊びの洒落)といって、とても面白いものだということ。自分もそれを習いたいと思った大名は、秀句を言う奉公人を探してくるよう命じます。良さそうな男に出会ったと思った太郎冠者が連れて帰ったのは、実は傘張り職人でした。大名の前に出て、傘についての秀句を次々に言う男、それがまったくわからない大名ですが、褒美として自分の持ち物を次々に与えてしまいます。

鵜飼　空之働

【うかい・むなのはたらき】

【物　語】

安房国(千葉県)清澄の僧はまだ見ぬ甲斐国(山梨県)へと旅に出ます。六浦、鎌倉をへて山梨、都留そして石和へ着きます。宿を探しますが貸してくれる里人はいなく御堂に泊まります。此処は深夜に化け物が出るといわれていますが法力を持って泊まります。すると松明を持った老人が現れます。「げにや世の中を憂しと思わば捨つべきに。その心更に夏川に。鵜使ふ事の面白さに。殺生をするはかなさよ」老人は鵜を休ませる為に御堂に立ち寄ります。僧は老人の身で殺生をするのはやめなさいと言うと若い時よりこの仕事で生計を立ててきたので今さら止めるわけにはいかないと言う。従僧が二三年前にこの様な鵜使いをあってもてなしを受けたと言うと老人はその鵜使いは死んでしまった。その時の話をしましょうと。石和川は上下三里の間は殺生禁断です。しかし密漁が絶えなかったので里人は罠をしかけ鵜使いを取り押さえます。鵜使いは手を合わせて命拾いをしますが簀巻きにされ川の底に沈められてしまいます。老人は鵜使いの幽霊と名乗り後を弔って下さいと頼みます。そして鵜飼の様(鵜の段)を見せ名残推しそうに消えて行きます。(中入)

僧達は法華経を石に一字ずつ書いて川に沈めます。すると閻魔大王が現れます。「地獄は遠くにあるのではない。目の前にある。かの物(鵜使い)は若い頃より罪を重ね鉄札(悪行を書いた札)は数知れず金紙(善行を書いた紙)には何も書かれていない。しかし僧に宿を貸した事により悪鬼は心を和らげて助ける事になった。」実相の風が吹いて千里の先まで雲晴れ真如の月が表れる。法華経はたとい悪人でも極楽へ送り救います。誠に有難い事です。この経を聞く人は慈悲の心を持ち救われます。法華経を讃えた閻魔大王は堂々と帰っていきます。

Kyogen Syuku-karakasa

A certain lord becomes suspicious when he notices that everyone around him is gathering together, saying something, and bursting into laughter. Curious, he asks his servant Tarō Kaja about it. Tarō explains that they are enjoying a wordplay called "shūku kosegoto," a kind of witty pun that is very amusing. The lord, eager to learn this entertainment for himself, orders Tarō to find someone skilled in such wordplay.

Tarō goes in search and believes he has found a suitable man. However, the person he brings back turns out to be nothing more than an umbrella maker. Brought before the lord, the man begins to recite one pun after another, all of them concerning umbrellas. The lord, unable to understand the wordplay at all, nonetheless pretends to appreciate it. Delighted by what he believes to be clever wit, he rewards the man with one of his possessions each time—until he has given away quite a lot.

Noh Ukai

A monk from Kiyosumi in Awa Province (present-day Chiba Prefecture) sets out on a journey to Kai Province (modern Yamanashi Prefecture), which he has never seen before. Traveling through Mutsuura and Kamakura, he finally reaches Tsuru and then Isawa. There, he seeks lodging, but none of the villagers are willing to offer him shelter. With no choice, he stays overnight in a small temple. It is said that apparitions appear there at midnight, but relying on his spiritual power, he resolves to spend the night.

At midnight, an old man carrying a torch appears. He laments: "Indeed, if one finds the world sorrowful, it would be best to abandon it. Yet my heart remains tied to the Natsukawa River, where the practice of cormorant fishing is so captivating, though it is but a vain act of killing." The monk admonishes him, saying that even in old age he should abandon such killing. But the man replies that since his youth he has made his living as a cormorant fisherman and cannot now give it up.

One of the monk's attendants recalls meeting a cormorant fisherman in this area two or three years ago who offered him hospitality. The old man reveals that fisherman has already died—and that he himself is that man's ghost. He recounts the story: though fishing in the Isawa River was strictly forbidden for three ri upstream and downstream, poaching continued. The villagers set a trap and captured him. He begged for his life, but they bound him in a straw mat and sank him to the bottom of the river. He now asks the monk to pray for his soul. Before leaving, he performs a dance evoking the motions of cormorant fishing (the "Cormorant Dance"), then sorrowfully disappears. (Interlude)

In the second half, the monks inscribe the Lotus Sutra, writing one character upon each stone, and cast them into the river as an offering. Then King Enma, the Lord of the Underworld, appears. He proclaims: "Hell is not far away—it is right before your eyes. This man (the cormorant fisherman), from his youth, accumulated countless sins, inscribed on iron tablets, while no deeds of virtue were written on golden paper. Yet because he once gave lodging to monks, even the demons were moved to compassion and allowed him salvation." At that moment, the wind of ultimate truth blows, the clouds part for a thousand ri, and the moon of enlightenment shines forth.

King Enma declares that even sinners may attain rebirth in paradise through the Lotus Sutra, which brings salvation to all beings. With reverence, he praises the sutra, and then, with majestic bearing, returns to his realm.

伝統を次の世代に…

大山能楽社保存会の取り組み

大山の各家々が役割を分担し、守り伝えられてきた伝統「大山能」。誕生から三百年が経った現代において戦後の混乱と後継者の不足という問題に直面する事となりました。しかしながら、先代宮司目黒修一翁は伝統の灯火を絶やしてはならないとの考えから、大山能楽社保存会を発足、観世宗家、そして大蔵流山本家のご協力の下に有志による能狂言の稽古場が開かれました。

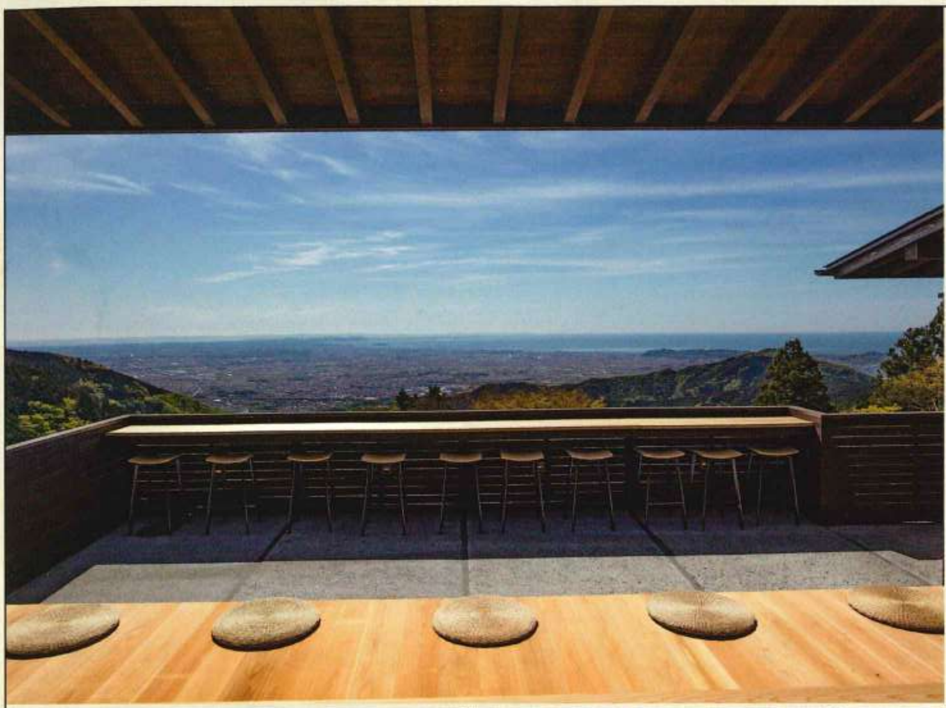
それから三十年余り、全国で少子化の問題が顕著になり、大山もまた少子化による後継者の不足に再び悩まされる様になりました。こうした現状を踏まえ、伊勢原市内より広く参加者を募り、文化庁の助成も受け、本年五月より大山能狂言親子教室を開催する運びとなりました。

本年の火祭薪能ではこの教室、大山能楽社保存会に参加された子供達にも出演をしてもらい、発表の場とさせて頂きました。まだ稽古を始めて日が浅い中、一生懸命に研鑽を積んだ次代を担う子供たちの晴れの舞台をご覧いただければと存じます。

大山能楽社保存会 演目

令和七年 大山能狂言親子教室 番組

仕舞	道灌	植田 いち椛	（うえだ いちか）
	鶴亀	中根 陽	（なかね ひなた）
	鶴亀	朝倉 康陽	（あさくら こうよう）
狂言	花争	石井 信也	
		杉浦 与喜	（すぎうら よき）
仕舞	道灌	柿澤 空流未	（かきざわ くるみ）
	合浦	岩﨑 梓	（いわさき あずさ）
	岩船	北田 結	（きただ ゆい）
狂言	痺り	石井 信也	
		黒岩 煌	（くろいわ こう）
仕舞	鶴亀	川田 好美	（かわだ このみ）
	岩船	清田 将気	（きよた まさき）
	竹生島	横澤 柚月	（よこさわ ゆづき）
	竹生島	朝倉 梓	（あさくら あずさ）
仕舞	道灌	佐藤 観音	（さとう かのん）
	岩船	長島 理仁	（ながしま りひと）
	清経キリ	大高 星波	（おおたか せな）
	小袖曽我	徳丸 真大	（とくまる しんた）
		徳丸 琢也	（とくまる たくや）
狂言	柿山伏	深瀬 琥太郎	（ふかせ こたろう）
		林 悠翔	（はやし ゆうと）
仕舞	鞍馬天狗	鈴木 杜青	（すずき とうせい）
	竹生島	青木 咲和	（あおき さな）
	天鼓	藤森 靖珠	
	橋弁慶	小林 頼広	（こばやし よりひろ）
		目黒 久仁彦	



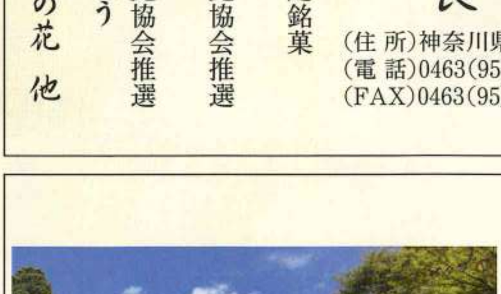
大山阿夫利神社
茶寮
石尊
設計　堀部安嗣
施工　内田幸夫

相州大山名産
明治五年
大津屋
きゃらぶき
大津屋きゃらぶき本舗
神奈川県伊勢原市大山六一八
電　話　〇四六三―九五―二七〇四
ＦＡＸ　〇四六三―九三―六一〇〇

百五拾年の
伝統が育てた
大山の味
神奈川県指定銘菓
あふり嶺
神奈川県観光協会推選
大山羊羹
伊勢原市観光協会推選
大山まんぢう
商標登録
富貴ごろも　むつの花　他

大山まんぢう本舗
良　辨
(住 所)神奈川県伊勢原市大山455
(電 話)0463(95)2033
(FAX)0463(95)2033

Fm yokohama 84.7



お休み処
大山阿夫利神社　参集殿
―洗心閣―
電　話：〇四六三・七五・八八九九
所在地：神奈川県伊勢原市大山十二
大山阿夫利神社下社境内